

漢字の成り立ちについては、昔から“六書(リクシヨ)”といふ言葉があつて、それは“象形(ショウケイ)”“指事(シジ)”“会意(カイイ)”“形声(ケイセイ)”“転注(テンチュウ)”“仮借(カシヤ)”の六つの用法のことを言ひます。

象形とは、「形を象^{かたど}る」といふ意味の言葉で、“日”“月”“山”“川”のやうに、形のある物を象^{かたど}つた、言はば絵文字とも言ふべき成り立ちのものを言ひます。

指事とは、形のない、抽象的な“事がら”について、「その事がらを符号的に指し示す」といふ意味の言葉で、“上”“下”のやうに符号的なものと、“大”“立”のやうに形を借りて「事を表現」したものとあります。

原理的には、形のある物は“象形”、形の無い抽象的な事は“指事”で、あらゆる“物事”を表現できるわけですが、然し、実際には、単純な内容のものは表すことが出来ても、内容の複雑なものや、また表しにくい言葉があつて、象形と指事だけでは表現できない物や事があります。

そこで、象形や指事を基^{もと}にして、これらの既製の文字を組合せることにより、表現する事を考へ出しました。この用法が“会意！”と“形声”で

す。

会意とは、「意味を会はせる」といふ意味の言葉で、“人”と“木”とを組合せ、「人が木のわきに腰を下して休む」といふ意味で“やすむ”といふ言葉を表現したり、“田”と“力”とを組合せ、「田んぼに出て力仕事をするのは男である」といふ意味で“おとこ”といふ言葉を表現する構成法です。

形声とは、「形と声と」といふことで、形とは言葉の意味、声とは言葉の発音、つまり「言葉の意味を表した部首と、言葉の発音を表した部首とを組合せた文字」といふ意味の言葉です。“江”や“河”のやうに、意味を表した“氵(川)”と、発音を表した“工(コウ)”“可(カ)”との組合せで作られた文字がこれです。

転注とは、車輪が転じ、川の水が海に注^{そそ}ぐやうに、漢字の意味が一つ所に止まってゐないで「移動」することを表した言葉です。例へば、“楽”といふ字は“樂器”の形を象^{かたど}つた象形字ですが、「音楽を聴くと心が楽しくなる」ことから、“たのしい”といふ意味を表す文字として使はれるやうになりました。この時、これを“転注”と言ふのです。

また、“考”といふ字は“老”と同じく“老人”の形を象^{かたど}つた象形字の

幼児はみんな天才

“耂”と“𠂔(コウ)”の形声字で、“老人”が本義の字ですが、「老人は“かんがへ”が深い」ことから“かんがへる”といふ意味を表す字として使はれるやうになりました。だから、これも“転注”といふことになります。

仮借とは、「仮に借りる」といふ意味の言葉で、「同じ発音の文字を借りて間に合はせる用法」のことを言ひます。例へば、“十”といふ字は“針”の形を象^{かたど}った象形字で、“針”が本義の字ですが、同じ発音の言葉の“数の十”を表す文字がうまく作れないため、借りて間に合はせました。この場合、これを“仮借”と言ふのです。

それで、“十”といふ字には、“針”と“数”との二つの用法があつたのですが、“針”は金扁^{かねへん}をつけて別字を作りましたので、“十”は“数”専用の字となつたのです。

仮借は、漢字の本義を捨てて、その発音だけを借りる用法ですから、外国の言葉を書き表す時の用法になりました。“英吉利斯(イギリス)”“仏蘭西(フランス)”“印度(インド)”“仏陀(ブツダ)”“釈迦(シヤカ)”などがこれです。

また、わが国の万葉仮名“波奈(花)”“必登(人)”なども仮借です。わが国では文字のことを“な(名前の意味)”と言ひましたので、“仮借字”

のことを“かな”と呼んだものでせう。

さて、象形と指事とは漢字の基本で、最も古いものです。昔は、文字とは言はないで、単に“文”と言ひました。しかし、今の漢字の大部分(90パーセント以上)は会意か形声です。これは、二つ以上の“文”が組合せられて作られましたので、これを母親と父親とに見立て、新しく作られたものを“子”に見立てて“字”と呼びました。

それで、“文”と“字”とを合はせて“文字”といふやうになったものです。ですから、正確には象形と指事とが“文”で、会意と形声とが“字”と言って区別するのが本当なのです。